

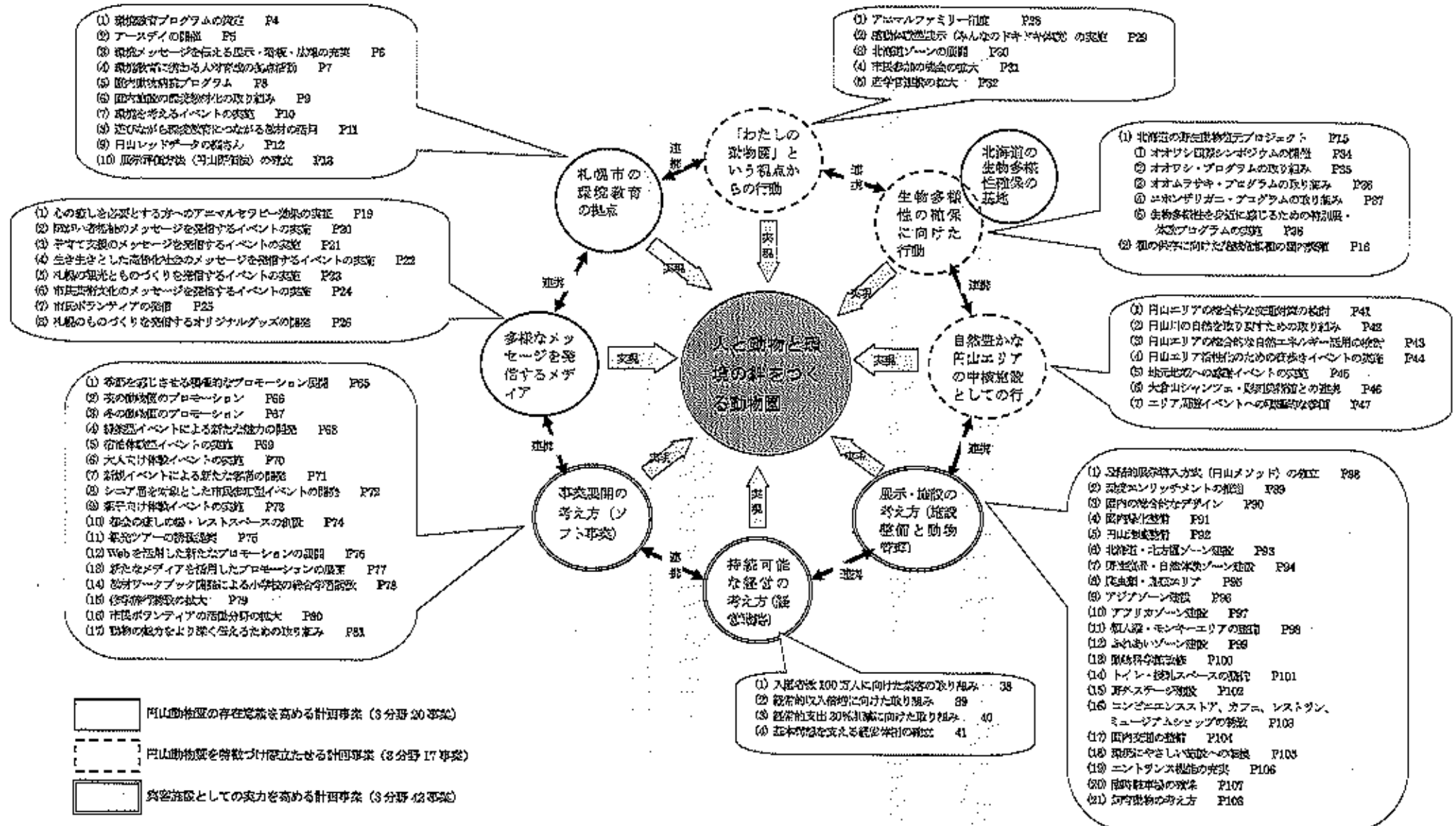
# 札幌市円山動物園 基本計画

## Sapporo Maruyama Zoo master plan

市民動物園会議 報告(案)

平成 20 年 3 月 1 日  
札幌市円山動物園

札幌市円山動物園 基本計画 計画事業の全体像



## 基本計画の策定にあたって

円山動物園では、2006年度（平成18年度）に円山動物園の利用者である市民が魅力を感じ、市民から愛され、そして「わたしの動物園」と市民に自慢してもらえる動物園をめざして、幅広い分野から斬新な意見を聞くため、市民、経済界、学識者、動物園運営、教育界などの分野の18名で構成する「札幌市円山動物園リスタート委員会」を設置。数々の議論を経て作成した基本構想（案）を市民に公表してその意見を反映し、2007年（平成19年）3月に「札幌市円山動物園基本構想」（以下「基本構想」という。）を策定しました。

これまで円山動物園は、札幌市民のレジャー、レクリエーション施設としての機能を強調し発展してきましたが、これからの動物園は、単なるレジャー施設ではなく、環境の世紀といわれる21世紀を迎え、生物の多様性が失われつつある今こそ、都市と自然、動物園と環境、市民生活と地球環境という視点から、公立動物園としての社会的役割を明確にし、動物園が抱える課題を整理したうえ解決の方向性を示すとともに、動物園としての将来像も定めたところです。

そして、2007年度（平成19年度）には、基本構想を実現するための「札幌市円山動物園基本計画」（以下「基本計画」という。）を策定しました。

### 1. 基本計画の考え方

この基本計画は、基本構想に基づくマスタープランの位置づけであり、特に施設整備に関しては、施設の老朽化に伴う長期の整備計画が必要なため、概ね10年間の長期計画となっている。

ただし、開園60周年となる2011年度（平成23年度）までについては、集中取組期間と位置づけ、第2次札幌新まちづくり計画（2007～2010年度）との整合性を保ちながら、実施計画（アクションプラン）を兼ねて、より詳細に記載している。

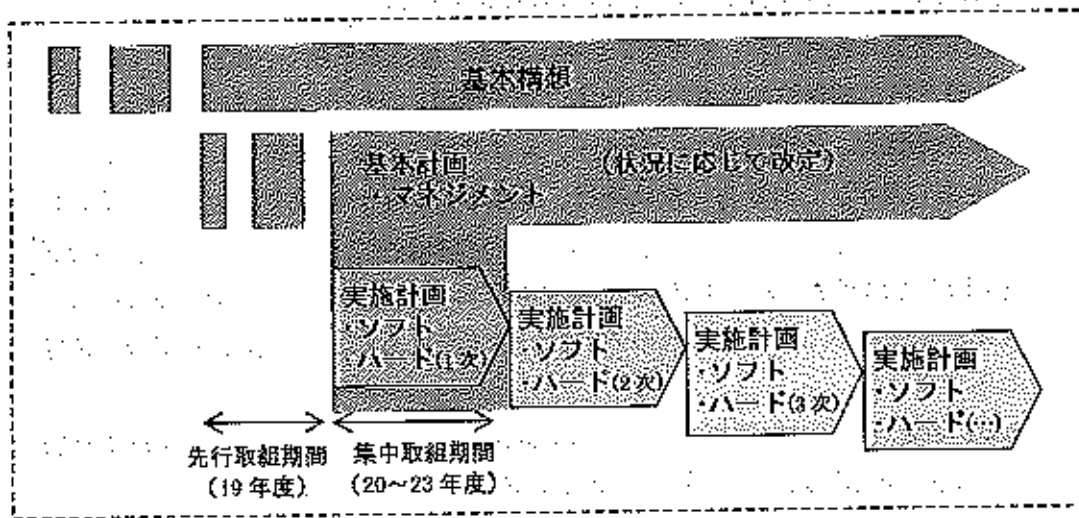
なお、2011年度（平成23年度）以降についても、次期まちづくり計画と整合性を持ちながら進める。

### 2. 経営環境の変化に伴う計画の修正について

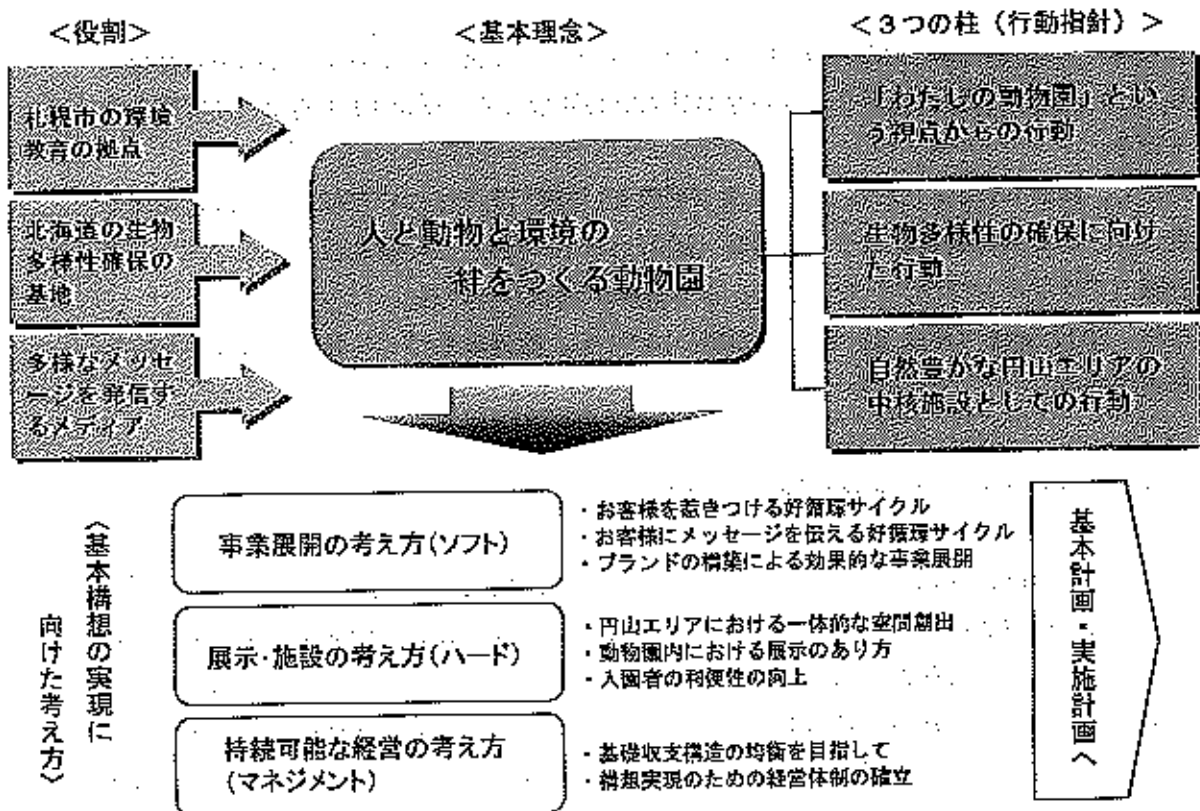
この基本計画は、2007年（平成19年）時点の経営環境をベースに策定したものであるが、札幌市の財政状況や原油価格・飼料価格の高騰、地球温暖化の影響など様々な外的要因によって常に実現可能性の検証が必要である。また、時代の流れに応じて動物園のあり方や動物園に対する市民ニーズにも変化が生じることや、国内外の動物園における飼育状況あるいは野生での生息状況によっては新たな動物の導入が難しくなることも視野に入れる必要がある。

よって、毎年度の札幌市の財政状況や園の収支状況に応じて、柔軟に計画年次等を変更することが想定されるが、あくまでも基本構想の理念の達成に向かって取組を継続するものである。

○ 基本構想と基本計画の位置づけ



○ 基本構想の構造図



### 3. 基本計画の構成について

本来、動物園が持つ機能としては、これまで重視してきたレクリエーション機能の他、環境教育、種の保存及び調査研究があり、これらの機能も充実していく必要があることを基本構想では強調してきた。

また、基本構想が示す3つの円山動物園の役割、3つの柱（行動指針）、さらに持続可能な経営の考え方（マネジメント）などの施策が連携して相乗効果をあげ、基本理念の「人と動物の環境をつくる動物園」を目指している。

これを受けた基本計画の構成も、基本構想の理念を実現するための概ね10年間の長期計画と短期の実施計画を兼ねたもので、「円山動物園の役割と行動指針」、「経営戦略とソフト事業」及び「施設整備と動物管理」の3部で構成している。

円山動物園では、絶滅の危機に瀕した動物たちも数多く飼育・展示しており、その本来の生息域で起こっている地球環境問題を市民に伝え、環境を守ろうというメッセージを発信している。野生動物の多様な生態や魅力ある行動は、恵み豊かな自然環境を大切に思う心をはぐくみ、自発的に環境行動をとる動機付けの機能を果たしている。

さらに、単に動物を見せるだけでなく、その生息域の環境や天候・気象、餌となる動植物との関係、食物連鎖、排泄物等の分解を担う微生物に至るまで、総合的な自然環境まるごと、あるいはそこで本来成立しているべき自然な物質と命の循環について、分かりやすく学ぶことができる。また、円山動物園内の施設でも自然エネルギーを活用したり省エネルギーを実践し、その成果を展示したりすることで、施設そのものも環境教育の教材として機能する総合的な環境教育の拠点を目指していく。

このため、動物が持つメッセージを活用した環境教育プログラムの開発拡充、種の保存や動物に関する調査研究等を行う体制を確立し、ソフトとハードが連携した総合的な学びの場を市民に提供することが重要との認識を持ち、ソフト重視の計画としている。

第1章の「円山動物園の役割と行動指針」では、基本構想に定めた「円山動物園の役割」、「3つの柱（行動指針）」に基づき計画事業を整理している。一般的に動物園が持つ機能の中から、札幌市民にとってどのような役割を持つことが望ましいかを考え、円山動物園の存在意義を高めるための計画事業を掲載した。また、どのような行動をとれば円山動物園らしさを強調できるかといった視点から、他園との差別化を図るための計画事業を掲載した。

第2章の「経営戦略とソフト事業」では、円山動物園を将来に向かって持続していくための長期の経営戦略と、集客施設としての魅力を向上させるためのソフト事業を整理している。

第3章の「施設整備と動物管理」では、第1・2章で打ち出している施策をハード面から支えるという構造をとっており、動物舎をはじめ来園者サービスや動線を考えた施設づくり全般について計画事業を掲載している。

飼育展示方法や動物舎の整備は、短期間に大規模な投資を行い整備することは財政上の観点からも困難であることから、当面の全体の配世計画を示し、今後、動物舎ごとに完成予想図を作成するが、ここでは動物の飼育環境をこれまでの人間（管理）中心の考え方から、動物を中心とする動物福祉（環境エンリッチメント）の考え方に大きくシフトさせているのが特徴である。また、園外に広がる円山エリアにおける一体的な空間も創出する考え方も盛り込むとともに、来園者の利便性を向上する便益施設の整備、案内（サイン）の充実を図る計画事業を掲載している。

<各計画事業の個票の凡例>

「役割」の欄

- 1：札幌市の環境教育の拠点
- 2：北海道の生物多様性確保の基地
- 3：多様なメッセージを発信するメディア

「行動指針」の欄

- 1：「わたしの動物園」という視点からの行動
- 2：生物多様性の確保に向けた行動
- 3：自然豊かな円山エリアの中核施設としての行動

## 目 次

### I. 「円山動物園の役割と行動指針」編

<b>1 札幌市における円山動物園の役割(1) 札幌市の環境教育の拠点</b>	
(1) 環境教育プログラムの策定	4
(2) アースデイの開催	5
(3) 環境メッセージを伝える展示・看板・広報の充実	6
(4) 環境教育に携わる人材育成の拠点活動	7
(5) 園内動物病院プログラム	8
(6) 園内施設の環境教材化の取り組み	9
(7) 環境を考えるイベントの実施	10
(8) 遊びながら環境教育につながる教材の活用	11
(9) 円山レッドデータの編さん	12
(10) 展示評価方法(円山評価法)の確立	13
<b>2 札幌市における円山動物園の役割(2) 北海道の生物多様性確保の基地</b>	
(1) 北海道の野生動物復元プロジェクト	15
(2) 種の保存に向けた絶滅危惧種の園内繁殖	16
<b>3 札幌市における円山動物園の役割(3) 多様なメッセージを発信するメディア</b>	
(1) 心の癒しを必要とする方へのアニマルセラピー効果の実証	19
(2) 障がい者福祉のメッセージを発信するイベントの実施	20
(3) 子育て支援のメッセージを発信するイベントの実施	21
(4) 生き生きとした高齢化社会のメッセージを発信するイベントの実施	22
(5) 札幌の観光とものづくりを発信するイベントの実施	23
(6) 市民芸術文化のメッセージを発信するイベントの実施	24
(7) 市民ボランティアの発信	25
(8) 札幌のものづくりを発信するオリジナルグッズの開発	26
<b>4 3つの柱(行動指針1) 「わたしの動物園」という視点からの行動</b>	
(1) アニマルファミリー制度	28
(2) 感動体験型展示(みんなのドキドキ体験)の実施	29
(3) 北海道ゾーンの展開	30
(4) 市民参加の機会の拡大	31
(5) 産学官連携の拡大	32
<b>5 3つの柱(行動指針2) 生物多様性の確保に向けた行動</b>	
(1) オオワシ国際シンポジウムの開催	34
(2) オオワシ・プログラムの取り組み	35
(3) オオムラサキ・プログラムの取り組み	36
(4) ニホンザリガニ・プログラムの取り組み	37
(5) 生物多様性を身近に感じるための特別展・体験プログラムの実施	38
<b>6 3つの柱(行動指針3) 自然豊かな円山エリアの中核施設としての行動</b>	
(1) 円山エリアの総合的な交通対策の検討	41
(2) 円山川の自然を取り戻すための取り組み	42
(3) 円山エリアの総合的な自然エネルギー活用検討	43
(4) 円山エリア活性化のための散歩イベントの実施	44
(5) 地元地域への感謝イベントの実施	45
(6) 大倉山シャンツェ・彫刻美術館との連携	46
(7) エリア周遊イベントへの積極的な参画	47

## II. 「経営戦略とソフト事業」編

17 持続可能な経営の考え方(経営戦略)	
(1) 入園者数100万人に向けた集客の取り組み	57
(2) 経常的収入倍増に向けた取り組み	58
(3) 経常的支出30%削減に向けた取り組み	59
(4) 基本構想を支える経営体制の確立	60
18 事業展開の考え方(ソフト事業)	
(1) 季節を感じさせる積極的なプロモーション展開	65
(2) 夜の動物園のプロモーション	66
(3) 冬の動物園のプロモーション	67
(4) 提案型イベントによる新たな魅力の開発	68
(5) 宿泊体験型イベントの実施	69
(6) 大人向け体験イベントの実施	70
(7) 新規イベントによる新たな客層の開発	71
(8) シニア層を対象とした市民参加型イベントの開発	72
(9) 親子向け体験イベントの実施	73
(10) 都会の癒しの場・レストスペースの創設	74
(11) 観光ツアーの誘致提案	75
(12) Webを活用した新たなプロモーションの展開	76
(13) 新たなメディアを活用したプロモーションの展開	77
(14) 教材ワークブック開発による小学校の総合学習誘致	78
(15) 修学旅行誘致の拡大	79
(16) 市民ボランティアの活動分野の拡大	80
(17) 動物の魅力をより深く伝えるための取り組み	81

## III. 「施設整備と動物管理」編

19 展示・施設の考え方(施設整備と動物管理)	
(1) 段階的展示導入方式(円山メソッド)の確立	88
(2) 環境エンリッチメントの推進	89
(3) 園内の総合的なデザイン	90
(4) 園内緑化整備	91
(5) 円山地域整備	92
(6) 北海道・北方圏ゾーン建設	93
(7) 野性復帰・自然体験ゾーン建設	94
(8) 爬虫類・鳥類エリア	95
(9) アジアゾーン建設	96
(10) アフリカゾーン建設	97
(11) 類人猿・モンキーエリアの整備	98
(12) ふれあいゾーン建設	99
(13) 動物科学館改修	100
(14) トイレ・授乳スペースの整備	101
(15) 野外ステージ建設	102
(16) コンピニエンスストア、カフェ、レストラン、ミュージアムショップの誘致	103
(17) 園内交通の整備	104
(18) 環境にやさしい施設への転換	105
(19) エントランス機能の充実	106
(20) 臨時駐車場の確保	107
(21) 飼育動物の考え方	108
●資料 施設整備関係図等	